

駆ける魂

世界の壁に屈した10代。日本に戻り語学や機械の知識鍛え直す

初めて世界で戦ったのは16歳の時。舞台は世界選手権125ccクラス。10代から20代前半が腕を競い合う若手の登竜門だ。中上貴晶もここで経験を積み、上のクラスにステップアップするつもりでいた。ところが、世界に飛ばたくはずの夢舞台は、高校生に冷酷な現実を突きつけた。

2年間、一度も表彰台に立つことができず、5位に2度入っただけ。年間順位は24位と16位。結果を残せなかったライダーに3年目のオフアールは届かなかった。

「今考えてみると、(世界で戦うための覚悟が)中途半端だった」。レースはライダーだけで勝てるものではない。チームと最適なバイクを作り上

2輪モトGPライダー **中上 貴晶** (25歳) ㊦



全日本を走りながら目は世界を向いていたと振り返る

げてはじめてライバルたちと勝負ができる。クラスが上がるほど、細かいポイントまでチームとのやりとりが必要となる。中上もコミュニケーションの重要性は分かっているつもりだった。「当時は英語をあまりしゃべ

れなくて、伝えたいことが伝えきれない。もともと度世界で」との思いを胸にすべてを見直した。運転技術や英語のスキルアップはもちろん、バイクの構造など機械的なこと

「まだ10代、やり直せる。もう一度世界で」との思いを胸にすべてを見直した。運転技術や英語のスキルアップはもちろん、バイクの構造など機械的なこと

「まだ10代、やり直せる。もう一度世界で」との思いを胸にすべてを見直した。運転技術や英語のスキルアップはもちろん、バイクの構造など機械的なこと

ってくる。それは日本語でも伝えるのが難しいこと。英語で伝えるには語学力も機械に関する専門知識も足りなかった。

日本に戻って2年目の2011年。全日本ロードレース選手権シリーズで圧倒的な速さを見せた。世界に再び咲くためには速さをアピールし続けるしかない。全日本で優勝し、その上で世界選手権シリーズにスポット参戦し、以前とは違った姿を見せ結果を残す。それが中上の思い描いた世界への道だった。

東日本大震災の影響で開幕が7月にずれ込んだ全日本のGP2クラス。世界選手権ではモト2クラスに相当するカテゴリーで、出場した5戦すべてポールトゥウインの圧勝だった。

全日本を走りながら、目は世界を向いていた。モト2のトップ選手だったら、どのくらいのタイムで走るか。チームスタッフと話し合った。「(限界まで走って)届かないか。ぎりぎりのタイムを設定した」。常に世界を意識することを忘れなかった。

国内で敵なしの中上は10月の日本グランプリに参戦。フリー走行、予選とアグレッシブな走りが見せつけた。決勝前の練習走行で転倒し、左肩甲骨骨折の重傷でレースを棄権するというミスを犯したが、それまでに与えた印象は強烈だった。翌年、中上は世界の舞台に復帰を果たした。

(敬称略)